

2010 ヨーロッパ紀行（1）ポーランドから二つの榮譽

中村 保

ポーランドは私にとっては初めての国である。親日的で親切な人たちであることは聞いていたが、探検家フェスティバルに招待されてこの地を訪れポーランドが大好きな国の一つになった。心からの歓待、もてなしを受け、親身になってお世話して頂いた。優しさ、気配り、最上のホスピタリティーに感銘した。

探検家フェスティバル”The 12th Explorers Festival”

2010年11月19日、ワルシャワの東南に位置するポーランド第二の都会、ウツ市の大学の講堂で700人の若い聴衆を前に気分は高揚した。イベントのテーマの一つとして、高校生・大学生に地理の勉強されるためのプログラムに私の「東ヒマラヤの氷河—温暖化の影響」が組み入れられた。素人ながら足で集めた写真、地図を使って東チベットの氷河後退の状況をパワーポイントで紹介した。興味を示してもらってほっとした。

12. EXPLORERS FESTIVAL
 www.explorersfestival.pl
 17 - 21 listopada 2010 r. / al. Politechniki 2a / Łódź

Tomasz Grzywaczewski / Polska *シベリア*
 Z masądu student prawa, z pasji dziennikarz i podróżnik. W górach Andów jadł z Berberami kuskus z jednej miski, a na bezkresnych stepach zakrywał rfonogorską tabakę. Stały współpracownik działów podróżniczych Wprost oraz Dziennik Gazeta Przemysł. Załączony wycieczki Samotnej Planety, której pewnie nigdy do końca nie poznamy, ale którą możemy nieustannie odkrywać. Dlatego nie mamuję czasu, nie czeka, i w swoich reportażach próbuje opisać oraz zrozumieć otaczającą nas rzeczywistość. Może zapomnieć o szczytach do zębów, ale na pewno nie zapomni o rozdanku i aparacie fotograficznym. Nie znośi nudy, a najszybciej cnie się w górze, kiedy każdy kolejny dzień stanowi nową przygodę i wyzwanie. W życiu orłw w podróży, zgodnie ze słowami Roberta Frosta, z dwóch dróg wybiera zawsze tę mniej uczęszczaną.

Bartosz Malinowski / Polska
 Nieustraszonego odkrywca drżkich i niezabetonowanych miejsc na Ziemi. Z wykształcenia technik obsługi ruchu turystycznego. Animator i pomysłodawca comiesięcznych imprez podróżniczych "Kultura w obiektywie". Miłośnik klimatów wschodnich, zafascynowany przyrodą i kulturą Azji, uwielbia długie wyprawy w dobrym towarzystwie. Komu przemierzyl wiele razy stępy i góry Mongolii, a Azję poznawał również z grzbietu wielbłądów i słoń. Pokonał pleszo, górskimi bezdroziami, ponad dwa tysiące pięćset kilometrów podążając Łukem Karakum. Latem kocha spać pod gwiazdami, a zimą w namiocie. Smakosz cmentnych piw. Przez życie wyjuje nieprzetartymi szlakami. W wyprawach towarzyszą mu aparat fotograficzny oraz dwie zasady: "chwytaj dzień" i "maszeruj albo złychał". Marzy o opłynięciu Ameryki Południowej jachtem Victoria. Przewodnik beśdzki. Członek i pilot Grupy wyprawowej Chatek.pl.

Filip Drożdż / Polska
 Student Wydziału Operatorskiego PWSFTiP w Łodzi i Grafiki w ASP w Krakowie. Autor zdjęć do wielu filmów dokumentalnych i fabularnych. Od najmłodszych lat podróżował po Polsce, a potem autostopem poza granice Europy, odwiedzając wiele czasu na rysowanie i fotografowanie interesujących go miejsc. Podróżowanie ma we krwi, ale najbardziej lubi wyprawy bez mapy, spotkania i rozmowy z ludźmi, których może poznać.

Tamotsu „Tom” Nakamura / Japonia
 Jeden z najmłodszych, jeśli nie najwzniejszy odkrywca Tybetu i wschodnich Himalajów, nazwany przez niego z powodu podobieństwa Alpami Tybetu, choć znacznie wyższych, bo osiąających ponad siedem tysięcy metrów wysokości. Dniaj mapy nie mają żadnych tajemnic. Wiele powtarza to bezymyślnie, jak papuga. Ale któż zna cały Tybet, czy też jego odległe zakątki przy zachodniej granicy Chin? Nawet tybetańskie, pochłonięte modłami plemiona, znają jedynie swoje pomarażone wiatrami doliny – to słowa słynnego Josepha F. Rocka. Nawet dziś te słowa mają wyjątkowe znaczenie. Wiele twierdzi, że góry są dostatecznie dobrze poznane, szczególnie większe pasma. Tom zafascynowany paanami górskimi rozciągającymi się od wschodniego Tybetu po zachodni brzeg Kotliny Syczańskiej, pokazuje niezwykłe bogactwo miedobych, oszłamających uroją, wspaniałych szczytów i dolin. Wiele z nich jeszcze długo pozostanie tajemnicą i dopiero przyszłe pokolenia odkryją je dla świata. Jest niewątpliwym autorytetem światowym, którego ogromna wiedza na temat tych regionów, to wynik konsekwentnej, dwudziestoletniej działalności eksploracyjnej podczas której trzydziści jeden razy wybierał się w Alpy Tybeta, góry wschodniego i południowo-wschodniego Tybetu, góry Hengduan, północno-zachodniego Junnanu. Lub wspinaczkę klasyczną. Poprowadził wiele dróg m.in. w Andach peruwiańskich i boliwijskich. Wznowił wieloletnią działalność eksploracyjną w Pałastwie, Maroku, Nowej Zelandii i Hong Kongu. Uchonorowany za swoją działalność eksploracyjną prestiżowymi nagrodami: księcia Chichibu - Memorial Mountaineering Prize, UIAA, Royal Geographical Society - Busk Medal, czterokrotnie zjazdu Japonii - Sports Grand Prix, Cłonek honorowy The Alpine Club, The American Alpine Club, The Himalayan Club, The Alpine Club, Royal Geographical Society.

18 *ホントの隊長の足跡をたどる* *2010* *Wala m Total 4* *21*



ウツ市大学での講演



大学講堂 700 人の学生

ウツ市は人口 65 万人、社会主義体制時代に繊維産業(ソ連に輸出)で栄えたが、第二次大戦中にドイツにより徹底的に破壊された。空爆をされなかった古都、クラクフとは対照的である。破壊による荒廃は後遺症として町の建物や雰囲気に残っている。探検家フェスティバルは町興の企画としてウツ・トレッキングクラブが主宰し実行しているウツ市のプロジェクトであるが、ポーランド山岳協会も積極的にサポートしている。

翌 11 月 20 日がメイン・イベントある。800 人はきているという若い観客が溢れるコンサートホールで「最後の辺境—チベットのアルプス」をパワーポイントで 160 枚のスライドを使って講演をした。巨大なスクリーンなので見栄えがする。終わって国際探検家賞受賞、名誉会員の認証と、思い出に残る素晴らしい体験だった。かくも大勢の若者が講演を聞いてくれたのは初めてなので感動した。日本では想像もつかないことである。若者だけでなく、ポーランド最強のクライマーの一人、クシストフ・ヴィエリッキやスロバキアのクライマーたちも来てくれた。

プレゼンターの顔ぶれは多彩であった。オーストラリアの冒険家カメラマン、エベレスト初登頂のテンジンの息子、エベレスト・ヘリコプター飛行のフランス人、オーストラリア砂漠バイクで横断したポーランド人、2010 年 8,000 峰 14 座完登のポルトガル人、モーターバイクで世界一周のアメリカ女性、気球でアルプス越えの英国人などである。異色はポーランド青年 3 人のシベリアからチベット横断の旅だった。第二次大戦直後、二人のポーランド人がシベリアに流刑になるが、彼らは脱出をしてシベリアからチベットを横断して遂にインドに到達し亡命する。荒唐無稽と思われるほど信じがたい過酷で厳しい逃避行だった。作り話であろうという風聞は後をたたない。この話は日本語にも翻訳されている。その足跡を辿る旅をしたのはポーランドの若い三人組である。テンジンの息子のジャムリン・テンジン・ノルゲイはアメリカに留学、ダーズリンに住みアイマックス(IMAX)で山岳映画を企画し作製している。映画撮影のプロで、父親の歴史を映像化した部分も入れたエベレストの映画を撮っている。

国際探検家賞 “Explorer International Award 2010”。 対象は登山、探検、アドベンチャー、研究の広範な分野にわたる。今までの受賞者はクリス・ポニントン、エドモンド・ヒラリー、ダグ・スコット、クルト・ディーンベルガー、リン・ヒル、マルコ・プレジ、日本人の舟津さんなどである。2010年の受賞者が私を含め4人、スイスの人力飛行士、カラコラム・ヒンズークシュの地図作成のポーランドのイェルジー・ワラさんも受賞した。舟津圭三さんは、アラスカ在住のマッシャー（犬橇使い）です。探検家と呼ばれることもあります。1989年12月から1990年3月にかけて行われた国際隊の史上初の犬橇による南極大陸横断に日本人メンバーとして参加、その功績でその年の朝日スポーツ賞を受賞している。犬ゾリレーサーとしても知られ、現在アラスカのフェアバンクスに在住し、北極アドベンチャー・ツアーの仕事もしていると聞く。

ポーランド山岳会の名誉会員。 認証書授与は探検家賞受賞と同時に行われた。存命中の外国人名誉会員は、クリス・ポニントン、ヘルガ・エッガー、ハリッシュ・カパディア、クラパチェル・ワルテル、ナジル・サビル、シューベルト・ピットである。故人ではアダムス・カーター、グンター・ディーレンフルト、リカルド・カシン、ジャン・フランコ、エドモンド・ヒラリー、ジョン・ハントなどがある。

2回の講演にあたり、たいへん優秀な女性の通訳（英語・ポーランド語）に恵まれたことは幸이었다。



ポーランド山岳協会の名誉会員認証

ポーランド登山界

ポーランドの登山界は長い歴史があり、ヒマラヤでは 1980 年 2 月にエベレスト冬季初登頂(隊長はザヴァダ)を果たしてその存在を世界にアピールした。山岳会の母体となるトタラ・クラブが 1871 年に創立され、1903 年にポーランド山岳協会の前身となる山岳会ができあがった。しかし第二次世界大戦後社会主義体制になって解体され、1956 年に自由化とともに復活した。さらに幾度か名称を・組織を変え、分散しているクラブを統合する形で 1974 年に現在のポーランド山岳協会(Polskie Związki Alpinistyczne = Polish Mountaineering Association or Federation)に集約、今日に至っている。現在の会長はヤヌス・オニシュキエビッツ氏、政治家である。社会主義時代には政府のスポークスマン、国防大臣も歴任した。世界のアルパインクラブ誕生の歴史からいうと、本家の英国についてイタリアともにたいへん古い。社会主義体制の時代は組織の維持に苦勞したと聞いた。2010 年現在、傘下で45のクライミング・クラブ(メンバーは 3,400 人)と22のケービング・クラブ(メンバーは 1,040 人)が活動している。V. クルティカ、K. ヴィエリッキ、故 A. ザヴァダ、J. クルチャップなど著名なクライマーを輩出し、2010 年までに三人がヒマラヤ 8,000m 峰 14 座を完登している。登山文化の伝統はしっかり根付いている。協会は**タテルニク**(**TATERNIK** ポーランド語でアルピニストの意)という立派な機関誌発行している。

ポーランドが目標としてきた「冬季初登頂と新ルート開拓」は着実に成果を挙げてきた。ネパールの 8,000m 冬季初登頂はポーランド隊が大半を占めている。

1979/80 エベレスト(8848)、1983/84 マナスル(8156)、1984・85 ダウラギリ(8167)、1984/85 チョー・オユー(8201 新ルート)、1985/86 カンチェンジュンガ(8586)、1986/87 アンナプルナ(8091)、1988/90 ローツェ(8501m)である。

1990 年にアルパインスタイルで登ったクシストフ・ヴィエリッキのダウラギリ I 峰東壁など、8,000m 峰の新ルート開拓も数多い。初登頂も少なくない。注目されるべき記録を下記に示す。

1939年 ガルワル・ヒマラヤ ナンダ・デビ 東峰 (7434)

1971年 カラコラム クンヤン・チツシュ (7852m)

1974年 ネパール・ヒマラヤ カンパチエン (7902m)

1974年 カラコラム ヒスパー・サール (7611m)

1975年 カラコラム ガッシャーブルム III (7952m)

1983年 カラコラム バツーラ サール V (7531m)、IV (7462m)

この時代のポーランドからの遠征は協会が強力なメンバーを選抜して送る官製プロジェクト的な色彩が強かった。が、自由意志で出かける本来のアルピニズムの登り方をするグループもあった。

2回の K2 登山を指揮したクルチャップさんが編纂した *The Polish High Mountains Climbs and Expeditions in Asia 1939-2010* 添付する。

伝統を踏襲して、近年は新たな挑戦としてカラコラム 8,000 峰の冬季初登頂を目指している。カラコラム 8,000m 峰は冬季にはまだ登られていない。世界の 8,000 峰 14 座のうち 9 座が冬季に登頂されているが、

それら 9 座は全てネパールかチベット(シシャバンマ)にある。冬季未登の 8,000 峰は全てカラコラムにある。2010 /2011 の冬はヨーロッパから下記の三隊が冬のカラコラム 8,000 峰に挑む。

- (1) ガッシャブルム I 峰(8080m):オーストリア・カナダ・スペインの混生チーム(新ルート)
- (2) ガッシャブルム II 峰(8034m):カザフスタンの D. ウルブコとイタリアの S. モロ
- (3) ブロード・ピーク(8051m):ポーランド隊

「ポーランド・冬のヒマラヤ Himalayas 2010-2015 計画」の一環として実行

カラコラムはネパール・ヒマラヤと比べると気象条件がより厳しい。気温が約 10℃低いし秒速 150-180km の烈風が吹く。登頂に成功するには 7,000m 前後のところに待機し、風が少し収まる合間をみて一気に頂上を往復する以外にチャンスはなかろうとポーランドの先鋭クライマーは考えている。上記の三隊の他にロシアのクライマーが単独でナンガ・パルバットの冬季初登頂を旨ざしたが、12月末に体調不良で C1 で敗退した。

平地が 95% 以上を占めるポーランドでクライマーは何処で訓練したのだろうかと疑問があったが、直ぐ氷解した。スロバキアとの国境にある 2,500m 前後のタトラ山脈は格好なゲレンデである。500-600m の岩壁の冬の登攀は厳しい。無数のルートが開拓されている。英国のスコットランドの山と同様に、ポーランドのクライマーはタトラで鍛えヒマラヤに向かう。日本アルプスや谷川岳と同じである。

ポーランドへ招待された背景

大国ロシアとドイツの狭間で悲劇の歴史を背負ってきたその国から探検家フェスティバルへの招待が届いたのは 2009 年の夏だった。しかし東チベット踏査が決まっていたので辞退したところ、2010 年のイベント「The 12th Explorers Festival」に来てくれということになり今回の訪欧が実現した。併せて、三年に一度 11 月に開催されるポーランド山岳協会の総会において名誉会員への推挙が決議された。私に声がかかってきたのは、自己宣伝になるが次のような背景がある。

重機メーカー IHI の企業戦士として長く海外(パキスタン、メキシコ、ニューージーランド、香港)に駐在し、登山の実践から離れていた「キセル登山家」が復帰して始めたのが、1990 年からの雲南・四川・東チベット踏査であり既に 32 回におよぶ。2001 年にシングル・ハンドで立ち上げた日本山岳会の海外向け英文ジャーナル Japanese Alpine News の編集は特集をいれて 14 冊になる。英国のアルパイン・ジャーナルとインドのヒマラヤン・ジャーナルには指定席をもらい毎年投稿してきた。海外への発信と探査の実践は車の両輪で「最後の辺境—チベットのアルプス」が広く欧米に知られるようになった。

王立地理学協会(英国)のバスク・メダルを受賞し、アメリカ山岳会、アルパインクラブ(英国)、ヒマラヤンクラブ(インド)そして日本山岳会の名誉会員にいただいた。また UIAA からは東チベット探査と地図作成と英文ジャーナルと評価してする賞が授与された。2003 年からアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集長をしてジョン・ハーリン III(父親はジョン・ハーリン II、注記①参照)は私の「ヒマラヤの東—チベットのアルプス」を 30 頁のカラー特集で世界の登山界に大々的に発信してくれ起爆剤を提供してくれた。

注記①:アメリカからスイスに移り住んでアイガー北壁直登(ディレットティシマ)に賭けた。何度かの挑戦の後、1966年3月、速攻アルパインスタイルの英米合同隊(リーダー:ジョン・ハーリンII)と物量作戦のドイツ隊との競合になり、最後は英米合同隊からドゥガール・ハストンだけがドイツ隊に合流して完登した。途中でジョン・ハーリンIIは墜落、非業の死をとげる。英米合同隊にはサポートとしてクリス・ボンントンも参加、ドゥガール・ハストンは1975年にボンントン率いる英国隊に加わりダグ・スコットとともにエベレスト南西壁を初登攀して頂上にたった。

海外への浸透はパブリシティーに止まらず海外からの講演に招聘された。アルパインクラブ(英国)、アメリカ山岳会、ヒマラヤクラブ、アイルランド山岳会と英語圏はほぼ一巡し、デンマーク、韓国も終え、2010年は非英語圏のイタリア、ポーランド、スペインである。4月にはリカルド・カシンの根拠地、湖水地方のレコトリノのイタリア山岳会で、5月にはトレント・フルム・フェスティバルで講演をした。2011年はニュージーランドを予定している。こうして業績は広く認知されることとなった。

ポーランドへの招聘を推進してくれたヤヌス・マイヤーさん(64歳、アウトドア・登山用具の製造販売会社の共同経営者)もヒマラヤに実績の多い知名度の高い登山家である。ヤヌスさんはクラクフの工科大学冶金科を卒業、1976年ノシャック、1986年K2、1988年アンナブルナ南壁、1989年エベレストへ遠征している。1990年に登山・アウトドア用品事業を始めるがブームに乗れず破産するが、友人に助けられて再出発し小規模ながら手堅い経営を続けている。ベトナムに製造工場を持っており、中国進出も計画している。1990年以降は厳しいクライミングから離れてトレッキングや未踏の地の探査を楽しんでいる。ピアフォー氷河からヒスパー氷河への旅をし、チベットへも出かけている。私を招聘した直接のきっかけはマイヤーさんの中央チベット・チャンタン高原踏査行の記録を英文ジャーナルに掲載したことによる。

日本の登山界との交流

ここ10年の海外での経験で、世界の山は広い、しかし登山界はどこかで繋がっていること実感してきた。ポーランドと日本の登山界との交流は深かった。過去形で表現したのは、1986年にポーランド山岳協会のミッションが日本山岳会と交歓するために来日して以来積極的な交流は途絶え四半世紀もの空白が続いていたからである。1960年の京都大学学士山岳会(AACK)がヒンズークシュ、ノシャック7492mを初登頂したとき12名のポーランド隊(第二登)と遭遇したのが最初であろう。2010年9月に初登頂50周年を記念して登頂者の岩坪五郎さんと酒井敏明さん他14名がポーランドを訪問し交歓した。学習院の芳賀孝郎さん、贄田統亜さんも参加し、日本山岳会の『山』(2010・11月)に芳賀さんが寄稿している。

両国の登山家同士の出会、接点はあった。沖允人さんはワルシャワ工科大学に半年ほどポーランド政府から奨学金を得て研究のために滞在し、その間にザヴァダさんと親交を深め、タトラ山群へはザヴァダさんの仲間と一緒に登っている。

1976年、カラコラムのスキャン・カンリ7544mを初登頂(永田秀樹、藤大路美興)した学習院隊とポーランドのクルチャップ指揮するK2登山隊とベースキャンプで交歓する。そして34年の歳月を経て登攀隊長だった贅田さんとクルチャップさんはポーランドで再会する。



K2 7,600m 地点からクルチャップさんが撮ったスキャン・カンリ

1976年には別の接点もあった。衰退を続ける日本の登山界で現役クライマーとして頑張っている坂下直枝さんから届いたメールを以下引用させて頂く。

「中村さんのご報告のなかに懐かしい名前が大勢登場しましたが、ヤヌス・マイヤーさんの名前ができて驚きました。1976年の夏、ジャヌー北壁を初登攀した余勢を駆って3人でアフガニスタン・ワハン谷のノシヤック峰を含めた7,000m峰をアルパインスタイルで登ろうとネパールから転進しました。ベース入りした翌々日6,700m峰を登攀中のピバークで高山病にかかり、ベースキャンプで急激に悪化し、ポーランド隊のヤヌス・マイヤーさんとドクター、メンバーの介抱で助かりました。命の恩人です。

お礼にソニーの小形レコーダーでモーツァルトとバッハのテープを流してクラシック・コンサートをした後、レコーダーなどポーランド隊に寄贈しました。ヤヌスさんから友好の印として大振りナイフを頂戴しました。小

柄で黒いひげ、顔のふっくらした人で話は魅力的で優しい男でした。当時はクラクフの工場に勤めていり聞きましたが、登山スポーツ用品の会社を営んでいるとは知りませんでした。あれから 35 年経ちます。お会いしたいものです。連絡先を教えてください。

ザヴァダさんには、小生が 1980 年に冬のアンナプルナ I 峰に単独で挑戦したときにいろいろなアドバイスを頂きました。当時は痩身で大学教授のような風貌でした。訃報は残念です。

世界は広いはずですが、登山界はどこかで世界中のいろいろな登山家と繋がっていますね。レポートを読んで改めて感じました」

坂下さんの印象どおり、ヤヌスさんは親切で気配り、そして知性豊かな人である。

私がニュージーランドの製鉄所建設プロジェクトで悪戦苦闘していた頃、ポーランド大使館の好意で 1986 年夏に日本山岳会とポーランドの交歓登山が実現し、アンジェイ・ザヴァダ(当時 57 歳)を団長とする 7 名の選りすぐりの登山家が来日した。エベレスト冬季初登頂のレシェック・チヒ、クリストフ・ヴィエリッキもメンバーだった。日本山岳会は今西会長以下総力で迎え入れ、読売新聞の協力、産業界の支援も受けて交流の成果を挙げた。登山は富士山と上高地で行われた。ザヴァダさんとチヒさんは永田秀樹さんと穂高に登り、残りは屏風岩でフリークライミングを楽しんだ。

シンポジウムの席ではザヴァダさんは 150 年におよんだ国の分割と第二次大戦後の困難な再建の歴史、ポーランドのアルピニズムについて説明し、自分たちのコンプレックスとしてポーランド人は 8,000m 峰を初登頂していない事実をあげた。「それで、なるべく国際的に効果のある登頂を狙おうと決めました。必ず新しいことをやること、他の国が辿ったルートには行かない」と語りポーランドの目指すべき道筋を示唆した。彼の発想はその後のポーランド隊の記録で実証されている。が、悲しいことにザヴァダさんは 10 年前に膵臓癌で他界した。

松田雄一さんによると、ポーランド側はお世話になった返礼に次はポーランドで交流登山をしたいから是非きて欲しいと日本山岳会に要望したが実現しなかった。ポーランドのクライマーの実力に太刀打ちできるメンバーは集まらないだとうと尻込みしてしまったらしい。

その後の交流は個人ベースの登攀で 2001 年に山野井泰史とクルティカがカラコラムのピアチェルヒ・タワー(標高 6,000m 弱)をペアで登った記録がある他は寡聞にして知らない。

イエルジー・ワラとジョセフ・ニカ

ポーランドの登山文化は海外遠征という光の当たる面だけでなく、文献や地図作成の分野でも他国の追従を許さない業績が地道に蓄積されている。日本でも知られているイエルジー・ワラさんのカラコラム・ヒンズークシュのクロニクルおよび地図作成とヤン・キェウコフスキさんの山岳百科大辞典(*WIELKA ENCYKLOPEIA GOR I ALPINIZMU* 17 x 25cm、全 7 巻)がその代表である。大辞典の第 2 巻目はアジア編の山名辞典で 800 頁におよぶ大書である。日本山岳会、日本山岳協会、山溪の「岩と雪」の紹介もあり、驚いたことに東チベット・雲南・四川のパートでは私が英文ジャーナル Japanese Alpine News 2003 特集号「チベットのアルプス」に掲載した地図 17 枚がクレジット入りでそのまま使われる。ここにも英文ジャーナルの価値がうかがえ、辞典編集者の幅広い見識と意欲がみてとれる。これほどの大辞典が

出版されている国は他に無いだろう。惜しむらくはポーランド語で書かれているので、他の国では利用されないだろうということある。資料作成という面では旧東欧圏の国の登山家の方が熱心である。

私のポーランド滞在中ワラさんに親しくアテンドしていただいた。一緒に探検家フェスティバルに参加し、タトラ山を案内して頂きスロバキア側にも入った。彼が住む京都と姉妹都市、古都クラコフを奥さんと一緒に案内してくれた。奥さんは芸術家で絵画に造詣が深く日本の浮世絵にたいへん興味をもっている。ワラさんは 80 歳になるがかくしゃくとしていて、地図に関する探究心は衰えを知らない。ヤヌス・マイヤーさんの家に一緒に泊まり地図談義に花を咲かせた。ヤヌスさんの山仲間が集まってきた。話題は山に限らない。いきなり「日本の島の問題をどうかんがえるか」と質問が飛ぶ。てっきり尖閣列島のことだと思いき話し出すと違っていた。中国ではなく、千島のことでロシアの大統領が国後島を訪れたことだった。ポーランドノ関心はロシアであることが分った。ポーランドのスーパー・マーケットでは 10,000km 離れた千島産の鮭のスモーク・サーモンが売られている。味はノルウエー産とおなじで値段は半額である。

40 年以上前からワラさんが改訂に改訂を重ねてアップデートしながら作り続けてるカラコラムとヒンズークシュの地図は欧米で最も権威があり信頼されている。客観性を持たせるため、絶えず外国の登山家、地図作成者からニュースを取り入れ精度を上げる努力を続けている。私の先輩、故吉沢一郎さんとは早くから情報交換をいていた。日本のカラコラム・ヒンズークシュ会議座長でカラコラム・ヒンズークシュの大部の登山地図集を出版した宮森常雄さんとの交流は深く、お二人の連絡を私が中継している。最近ではスペイン・パルセロナ郊外の山岳図書館とも連携を始めて、ティリチ・ミール 1:70,000 の詳しい地図を作成した。私はスペインの山岳図書館とワラさんに四川省ミニヤ・コンカ山塊の地図を作成してもらうため、中国の 1:25,000、100,000 の地形図、パノラマ写真など手元にあるすべての資料を送っている。ワラさんはもともと機械技師で冷凍圧縮機の製造工場での仕事が本職だが、地図の世界にのめり込み、四季を通じてタトラ山を訪れ新ルートの開拓をし、アルプス、コーカサス、ヒンズークシュ、イランの山、天山山脈にも出かけている。



クラコフにて、ヤヌスさん(左)
ワラさん夫婦(右)



ワルシャワにて、ニカさん(左) クルチャップさん(中央)

マイヤーさんに案内してもらいワルシャワでジョセフ・ニカさんにお会いすることができた。贄田さんへ送る自書『ポーランド人のヒマラヤ・偉大なる登山』を持参してクルチャブさんもきてくれた。ニカさんのお宅を訪ねるなり、いきなり尾形好雄さん、池田常道はどうしているかと尋ねられた。尾形さんとは日本ヒマラヤ協会の月刊『ヒマラヤ』、池田さんは山溪の『岩と雪』を通じての緊密な情報交換があった。Japanese Alpine News を丹念に目を通して知っていることを知り嬉しかった。

ニカさんは 2010 年 11 月現在 86 歳、数ヶ国語に通じ 35 年間 *TATERNIKA* の編集長を務めた。アメリカン・アルパイン・ジャーナルの名編集長、アダムス・カーターのポーランド版である。故吉沢一郎さんのこともよく知っていた。お願いしたしポーランド山岳協会の歴史と組織を手早くまとめて提供してくれるところはまだまだ現役である。ポーランドの困難な歴史の中でニカさんも厳しさに耐えて生き抜いてきた。第二次大戦中はタトラ山中の地下政府でドイツ軍に抵抗してきたという。ニカさん、クルチャブさん、マイヤーさんとの会話のなかで自由と人生の大切さを聞き、探検や登山の哲学について語る時ユーモアを忘れない感覚と心暖かさに強い印象をうけた。

初冬のポーランドは陰鬱で底冷えがする。翌朝 11 月 25 日、小雪舞うワルシャワ空港を飛び立って次の目的地スペインのバルセロナに飛んだ。直行便で 3 時間、太陽の国は快晴だった。

2010 ヨーロッパ紀行（2）スペイン・ドイツ

中村 保

スペイン山岳図書館

11月25日、雲が低く垂れ込め、小雪まじり寒いワルシャワから地中海のバルセロナまで直行便で3時間である。北ヨーロッパの陰鬱な天気は嘘のように青空で太陽が眩しい。山岳図書館のジョセプ・パイティユビさんとカルロス・カペラさんが空港で出迎えてくれた。山岳図書館と書いたが、正式名称はカタリニア語で *Servei general d'informacio de muntanya - centro de documentacio aplina*（以下 SGIM）で山岳情報を提供するサービス・センターの意味で実質は山岳情報サービスを兼ねた山岳図書館である。バルセロナから車で40分ほどの人口20万人のサバデル市にある。



SGIMとのコンタクトのきっかけをつくってくれたのは薬師義美さんである。薬師さんはSGIMが日本語文献を収集するにあたり協力し、10年前に薬師ヒマラヤ文献目録の講演のためSGIMから招待された。薬師文献インデックスは欧米では有名で広く援用されている。その頃私も文献収集に若干お手伝いをしており、折しも英文ジャーナル Japanese Alpine News 立上の準備をしていた。英国、アメリカ、ニュージーランド、カナダの英語圏への配布先については拠り所があったが、ヨーロッパ大陸は雲を掴むような状況だったので、思案余ってSGIMにお願いし、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアなど非英語圏の情報を提供

してもらった。そんな経緯があり、今回のポーランドでの探検家フェスティバルに出かけることを **SGIM** 代表のジョセプ・パイティユビさんに伝えたとこ、バルセロナに招待するのでカタルニア山岳会でも講演してもらいたい、併せてサバデルの山岳図書館を是非見て欲しいとの連絡を受けた。

SGIM は1974年にサバデル市の有志により産声を上げた。目的はスペインで唯一の山岳図書館をつくることで、世界の山岳文献・資料を収集して一般に公開するためである。山岳雑誌を含む文献、地図、写真、フィルムを網羅する。現在は 15,000 冊の蔵書があり、日本語の文献も 770 冊ある。日本山岳会の『山岳』と山溪の『岩と雪』は完本出揃っており、日本ヒマラヤ協会の『ヒマラヤ』は大事な号はある。京都大学、同志社大学、神戸大学、北海道大学などのジャーナルも可なり整備されている。中国文献も積極的に集めている。しかし蔵書の充実ぶりとしては道半ばであろう。

図書館の建物自体と内部の広いスペースと配列は立派である。コロラド・ゴールデンにあるアメリカ山岳会本部やイタリア山岳会トリノの図書館に匹敵する。現在の建物は 1993 年に整備されたもので、サバデル市が古い教会を無償で貸与し、電気、空調、ガス、水も無償で賄っている。レイアウトは書架、映画室、集会と作業場所がゆったりととられ、写真、地図、登山用具も展示されている。

SGIM を支援しているのは次の5団体と個人である。

- (1) Federacion Espanora de Deportes de Montanya y Escalada スペイン山岳連盟
- (2) Federacio d'Entitats Excursionistes de Catalunya カタルニア山岳連盟
- (3) Generalitat de Catalunya カタルニア自治政府
- (4) Diputacio de Barcelona バルセロナ行政府
- (5) Auntamente de Sabadell サバデル市 (建物提供)
- (6) 個人のサポーター 約 80 名、年会費 1 人 50 ユーロ

これら支援団体の中で重要なのは(1)と(3)で、運営費を出してくれている。しかし、最近の経済不況、国家財政の危機で運営費の拠出が減らされているのが問題であると聞いた。バルセロナの不動産市場は低迷、マンションの売れの残りが目立っていた。これからは内外のサポーターを増やし財政基盤をすこしでも強化したいという。

スペイン山岳連盟 **FEDME = Federacion Espanora de Deportes de Montanya y Escalada** は大きな組織である。2009 年の年次報告書によると傘下に23の州の山岳連盟があり、会員総数は 81,227 人である。

成人会員		ジュニア会員		総計		
男子	女子	男子	女子	男子	女子	合計
57,586	19,189	2,754	1,692	60,350	20,877	81,227

州単位の23の連盟の中で最大はカタルニア山岳連盟である。会員総数は男子 12,471 人、女子 5,452 人、計 17,513 人で傘下には 250 のクラブが所属する。バルセロナ市だけで傘下のクラブは 150 を

数え 10,980 人の会員を擁する。スペインの登山界はカタルニアのバルセロナが中心であり、そこに山岳図書館がつけられたことが頷けた。ちなみに別の州の首都マドリードの会員は約 7,000 人である。スペイン山岳連盟の組織、構成は日本山岳協会に類似している。傘下に都・県岳連がありその下部組織として多数の山岳会がある日本に近いといえよう。

SGIM の運営は 4 人のボランティアが行っている。代表のジョセブ・パイティユビさん(67 歳)、タクシー・ドライバーのカルロス・カペラさん(57 歳)、写真家で FEDME 山岳ガイドのサビ・ロンゲレスさん(47 歳、ジョセブさんの奥さんの弟)、アンナ・ロンゲレスさん(49 歳、ジョセブさんの奥さん)で、言ってみれば家族と近くの友人だけで毎週月火の二日間だけやってきて図書館を維持している。報酬は貰っていない。ジョセブさんはカタルニア山岳連盟の重鎮でヒマラヤの経験もあり、1982 年にカラコラムのディスタギル・サール 7885m の第 2 登をしている。

SGIM が一般に公開されるのは 4 人のボランティアのがくる月火の夕方だけである。人を有給で雇う資金がないので、公開する日数を増やせないという。スペインの中心、マドリードから遠い場所に、週に 2 日しか公開されないスペインで唯一の岳図書館があることに違和感をいだく向きもあろう。しかし、上記のようにカタルニアは登山人口は一番多い州でヒマラヤ遠征の実績も数多い。スペインの登山文化がここに立派な図書館を持つことに意義を認めるスペインの登山文化の背景があると言えよう。日本山岳会のライブラリーと協力関係を持ちたいと提案された。できるだけの対応をしたいと思います。地図作りのために SGIM はホーランドのヤヌス・マイヤーさん、イエルジー・ワラさんと緊密に連携している。ワールド・マウンテニアリング・コミュにティーという言葉で欧米の登山家からよく聞く。世界の登山家はどこかのコミュニティで繋がっていることの一例であろう。私は彼らにできる限りの資料を提供し中国四川省ミニヤ・コンカの図作成を依頼している。

カタルニア講演とモンセラート

地中海に面した人口 300 万人カタルニアの州都バルセロナはオリンピックで知られ、ガウディで有名だがカタルニアはスペインのなかでは登山が盛んな土地で、ヒマラヤでの実績は少なくない。ピレネーの南側に位置し規模は小さいが美しい山がたくさんある。バルセロナに本拠を置くカタルニア山岳連盟の本拠地がバルセロナである。私の講演はサバデルに隣接する人口 20 万人の繊維産業で町、テラッサの山岳センター 100 周年行事の一つに組み入れられた。テラッサに住むジョセブさんの計らいである。テラッサに限らず他の山岳クラブの活動もそれぞれ歴史があり活発のようだ。



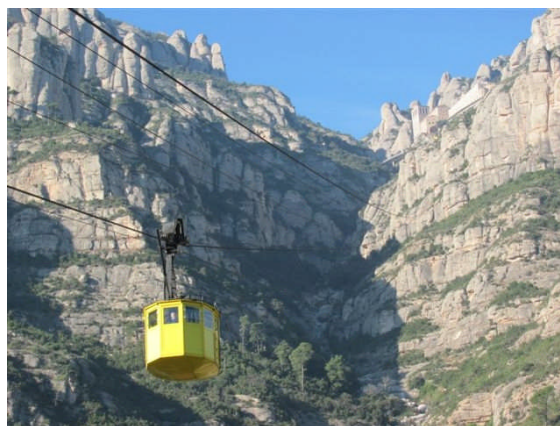
こじんまりしたセンターの会場に 110 名ほど集まってくれ、ポーランドとは違った打ち解けた和やかな雰囲気
でスライドショーと話ができた。質問も活発で張り合いのあるやり取りを楽しんだ。ポーランド同様、いい
通訳(英語—カタルニア語)の女性がついてくれたので流れはスムーズにいったことも幸いした。1974 年に
スペイン隊を指揮してアンナプルナ東峰 8020m を初登頂したジョセプ・アンゲラーダさんが奥さんとバルセロ
ナからきてくれた。彼はクリス・ポニントンと親しい。メコン源流への踏査にも出かけているので話が弾ん
だ。

30 年前に仕事で 6 年間メキシコに駐在していたので、忘れてしまっているとはいえ、スペイン語を使うこと
を楽しみにしていたが、カタルニア語はスペイン語とはだいぶ違うのであてが外れてしまった。フランス語が混
じっているような、ポルトガル語にも近いような感じを受けた。カタルニヤ伯国は中世ヨーロッパの影響を受
けながら勢力を地中海に拡大し、4 世紀には亙り黄金時代を謳歌したが、1714 年スペイン継承戦争で
敗北、自治権を失う。しかし、19 世紀半ばには再び発展が始まり、カタルニア・ルネッサンスが起こりガウ
ディなど建築家を輩出する。独裁者フランコの死後、自治権を獲得し、カタルニア語をスペイン語同様
に公用語として復活させた。私がスペイン語で話かけても返事は英語で返ってくるので、学習効果はな
かった。

講演は午後 9 時に終わったがスペインの夜は遅い。テラッサの市長さんが 20 名ほどを豪華なレストランで
歓待してくれた。私の隣には 1985 年テラッサ登山隊のメンバーでネパール北西部のサイパル 7031m の西
稜經由第 2 登、南西壁經由第 3 登をしたジョアキン・プルネスさんが座り、同志社隊の初登の記録にたい
へん興味を持っていると話してくれた。プルネスさんはジョセプさんとディスタギル・サールを登ったパートナー
である。他にも意欲的なヒマラヤにストが数名いて熱気が溢れ、美味しいスペイン料理とワインに時間の
経つのを忘れた。市長さんはカタルニアの山の本を進呈してくれた。お開きになったのは午前になってか
らだった。スペイン流である。

嬉しかったことは、南米のペルー・アンデスの登攀クロニクルを整備発信している「アンデス登山情報セン
ター」代表のセビ・ポホルケスさんがバルセロナから 600km 離れているところから来てくれたことである。セビさ

んはたいへん奇抜なアンデス研究者である。日本人のペルー・アンデス、コルディエラ・ブランカ山群における初登頂の記録を丹念に拾い、リストと解説を書き、地図に展開してくれた。労作である。本来日本人がやって当然のことをスペイン人が自発的にしてくれたのである。その英訳と日本語訳を Japanese Alpine News 2010 号と『山岳』2010 年に掲載した。



山岳図書館訪問と講演が終わって、ジョセブさん一家と 11 月 27 日はバルセロナ市内観光、27 日はモンセラート僧院と岩峰群へ遠足に出かける。モンセラートはテラッサから見えるユニークな岩の城砦である。テラッサから車で一時間、ゴンドラで僧院まで上り、1931 年につくられてケーブルカー標高 1,200m 台の岩峰群の一角に着く。そこから岩峰の裾をめぐる軽いトレッキングを楽しんだ。休日のせいか、多くのクライマーが岩に取り付いている。

モンセラートの岩峰群には 450 の奇岩のピナクルがあり、高さは見たところ 50ー150m、それぞれに形を模した名前がつき、4,000 のクライミング・ルートが開かれている。カタルニアのクライマーにとって岩登りの良いゲレンデである。モンセラートの岩は海底に堆積した各種の岩のセグメントが集塊(コングロメレーション)して出来上がったもので、世界でここにだけしか存在しないという。岩は硬くホールド、スタンスに富んでいる。ピレネー山脈との間には小規模ながら美しい山塊が存在しクライミングの場所を提供している。

ハンブルクへ、「アルプスのチベット」英語版

余談だが、訪問先の方々へのお土産には、先方の好みや趣味が分らないときはいつも頭を悩ます。日本的なものに絞ってもありきたりになってしまう。ハンブルクの出版社、ペドロさんへ家族へのお土産もそう。今回は可愛い小学生低学年のお嬢さん二人には日本製のローキティの腕時計を、奥さんにはバルセロナのモダンなペンダントを、肉製品に目がないペドロさんには趣向を変えてスペイン特産のハモン・セラノ(生ハム)にした。これが好評だった。バルセロナの中央市場で極上のイベリコ豚のハモン・セラノを買った。値段、品質(味)はピンからキリまでである。極上品は最高級の霜降り和牛と同じくらいの値段である。ペドロさんはたいへん喜んでくれた。今までに食べたことがない、とろけるような美味しいハモン・セラノだった。

11 月 29 日、好天が続きこの日も快晴、最後の目的地、ドイツへ移動する。ジョセブさんとカルロスさんが見送りにきてくれる。バルセロナからハンブルクへは格安のベルリン航空のシュツツガルト乗換便である。

待合室にいたらシュツツガルトは雪なので遅れるとのアナウンスがあったが、一時間遅れで離陸した。群青の地中海をひと飛び、イタリアのトリノ上空を過ぎアルプスにさしかかる。純白の眩しく輝くアルプスを越えると機は一気に厚い雲の中に入り 20 分ほどで雪降りしきるシュツツガルト空港に着陸する。

ハンブルク空港ではペドロさんが迎えてくれる。彼との出会いは幸運であった。2006 年に一通の E メールがドイツから届いた。四川省ミヤ・コンカの本の出版を進めており、私の写真も使いたいので条件をオファーしてくれという内容だった。知らない相手であったが快く引き受け 30 枚のカラー・スライドを送っておいたら、半年ほどしてできあがった本 *Minya Konka, Schneeberge im Osten Tibet (Michael Brandtner)* が届き、17 枚の写真使用料 1,700 ドルが送金されてきた。あわせて、私の「チベットのアルプス」出版したい、費用はすべて負担するからドイツにきてくれないかと言ってきた。まったく予期しないことだったが、カラー・スライド 300 枚、ネガフィルム、Japanese Alpine News 掲載の英文 300 頁、多くの地図など材料をかき集めてハンブルクに飛んだ。ドイツ語版豪華本 *Die Alpen Tibets* の始まりで、2008 年の 6 月に出版された。

ペドロ・デチジェンさんはケルン大学医学部出身の心精神科医で現在は 50 歳、奥さんも同業でハンブルクが目抜き通りにそれぞれが心療クリニックを営業している。*Minya Konka* のマイケルとは高校、大学の同期生である。マイケルは工学博士のエンジニアで、シーメンスの火力発電機部門の調達部門責任者として世界各国を飛び回ってて。二人は竹馬の友で、四川、青海に数度トレッキングに出かけている。ペドロは頭脳明晰の秀才で、明るく温厚な気質、世話好き、料理好きで何よりも家族思いである。家内は、彼のような素晴らしい外国人に会ったのは初めてと手放しで褒める。

本業の精神科医の仕事で、毎日患者とだけ向き合っているのでは飽きるのでは出版業を始めたという。プロなみのコンピューターの使い手で、いろいろなソフト・ウエアを駆使してパソコンが画面上で本の原稿を編集する。写真のスキャン、画質調整は言うに及ばず、地図の作成は独自の領域に達している。アメリカ、中国の衛星画像をくしして高度な等高線いりの地図をつくる。

Die Alpen Tibets の打ち合わせを始めるにあたり、「こういう豪華本の出版は日本では売れないし、引き受けうる出版はない。ドイツではどうか。売れる見通しは」と質したところ、ドイツには 200 年に亘る出版文化の伝統がある。心配しないでよいとの返事であった。ドイツ語版の次は英語版である。ドイツ語圏はドイツ、オーストリア、スイスと旧東欧圏の一部を入れて 1 億人、英語圏に比べるとマーケットははるかに小さい。ドイツ語圏以外の登山家かは英語版を待っている。クリス・ボニントンやケンブリッジ大山岳会の重鎮らからは半世紀は役に立つ本になるだろうと期待を寄せられている。

今回は 6 日間ペドロさんの家にお世話になり打ち合わせをし、全体の構想と第 1 巻の内容を固めた。四巻の構成は次の通りである。

- 第 1 巻 東チベット探査—念青唐古拉山東部と崗日嘎布の未踏峰
- 第 2 巻 深い浸食の国—東南チベット、メコン・サルウィン・揚子江大峡谷
- 第 3 巻 四川省西部高地—東チベット東端のアルパイン・パラダイス
- 第 4 巻 チベットのアルプスの彼方—青海省、アジアの大河の源流



ドイツ生態学者と植物学者(右)



ペドロさん一家

ハンブルク滞在中にドイツ人学者男女二人が私に会いに訪ねてきてペドロさんの家に二晩泊まった。彼らは梅里雪山巡礼路を2回一周し深い浸食の国の植物生態を出版した学者であり、マウンテン・バイクでアドベンチャー・ツアーを楽しむ驚くべきタフ連中である。冬季バイカル湖横断、カシュガルから中央チベットのシャンタン高原へ走り6,000m 峰の初登頂など、クライミングより忍耐力を求められる冒険をつづけている。女性(37歳)はポツダムに住む気鋭の植物学者で若くして賞をとり、男性(45歳)はワグナーの故郷の町に住む生態学者である。お互いの専門分野を補完するいいペアにみえた。

私に会いにきた目的は、2009年9月の梅里雪山主峰カワゲボ(カワカルポ)6,740m 西面の未踏のシェグ氷河探査を紹介するためだった。私の知る限り、この氷河に入った記録はない。彼らは巡礼路から氷河末端に達し、デブリの上に繁茂する植物と樹木の観察を行った。カワゲボ西面の荒々しい障壁の写真は印象的である。貴重な記録なので、彼らの希望もありJapanese Alpine News 2011号に掲載をすることにした。2011年の1月半ばに厳冬のシベリアをマウンテン・バイクで走破する。ペドロさんに進呈した吉田外司夫さんの『ヒマラヤ植物大図鑑』(山と溪谷社)を見てどうしても買いたいというので、帰国後すぐ購入して送付した。意義ある出会いで繋がりの輪が広がってゆくのが嬉しい。

最後の夜はペドロさん一家と学者二人のために私が板前になり天婦羅パーティーで締め括った。いつも天麩羅粉と醤油、箸は持参する。ポーランドのヤヌス・マイヤーさんの家でも天婦羅を揚げて喜ばれた。ニュージーランドに滞在していたとき、お客さんの家で天婦羅パーティーの出張サービスをよくした経験のお陰である。旅の終わりに相応しい和やかな締めくりだった。